

主 題：希望をもって生きる 3
聖書箇所：ペテロの手紙第一 3章18節

キリストに対して忠実に生きて行くには覚悟が必要です。なぜなら、主に従って歩んで行くとき、私たちに様々な迫害・困難がもたらされるからです。

I ペテロ1： 6「…いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならぬのですが、」

2：12「彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、」

19「…不当な苦しみを受けながらも」

20「…善を行なっていて苦しみを受け、」

3：14「たとい義のために苦しむことがあるにしても、」

4：12「あなたがたの間に燃えさかる火の試練を、」

14「キリストの名のために非難を受けるなら、」

16「キリスト者として苦しみを受けるのなら、」

19「神のみこころに従ってなお苦しみに出会っている人々は、」

神の前に忠実に生きようとしたその結果は、彼らに試練や苦しみを訪れたというのです。しかし、その中にあってもクリスチャンは喜びをもって、感謝しながら、希望をもって生きることができるのです。その秘訣をペテロは教え、私たちはこれまで学んできました。「主を覚えること＝主がどのように偉大なお方であるかを覚えること」です。私の信じるイエスとはどのようなお方であるか、どんなに偉大な神なのかを知れば知るほど、希望が湧きます。問題が起こったとしても、「神はこの機会をどのように用いて御栄えを現わされるのだろうか」、「この機会を用いてどのように私を強め、成長させてくださるのだろうか」と考えるだけでなく、「主の最善が成されることに期待します」という信仰者へと変えられて行くのです。それが私たちが目標とする信仰者なのです。

前回、キリストは主権者であり、至高のお方であることを学びました。このお方のみこころが成されるのです。続いてペテロは、このイエスがどれほど優れたお方か、どれほど偉大な神かを教えています。

☆イエスがどれほど優れた偉大なお方か

18節「キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。」、これは新約聖書において、最も簡潔に、イエスの十字架を説明した箇所です。ここに示されているイエスの歩みは私たち信仰者に大きな励ましをもたらします。

A. イエスの人生＝すべての点において父なる神に対して忠実でした。

1) キリストの模範：キリストも同様に苦しみました！

日本語では訳されていないのですが、18節の初めには「なぜなら」という接続詞があります。これは13－17節に記されている、神の前に正しいことをしていながら迫害を受けているキリスト者に対するパウロの励ましです。それは、困難を経験するたびに「このまま正しいことを行ない続けていていいものだろうか？」と妥協を考えてしまうことがあるから、励ましが必要なのです。

I ペテロ2：21「あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。」。II テモテ3：12「確かに、キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」。イエスの経験は私たちのそれよりはるかに厳しいものです。「…人の子には枕する所ありません。」という地上の歩みでした。しかし、その中でも常に喜び、感謝し、希望をもって歩まれたのです。

2) キリストの平安、喜び

十字架に架けられているときでも、彼をあざける人々に対して愛と憐れみを持って接されました。ルカ23：34「そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。」。平安の中に自分のことより他の人のために祈られたのです。これはクリスチャンがこのようにできることを教えています。

神が助けてくださるからです。神の力、平安を与えてくださるから、どんなときでも喜びと平安、感謝

をもって過ごすことができるのです。イエスは私たちにとって完全な模範です。不可能なことを示されたわけではありません。

B. イエスの死

1) イエスは「身代わり」として死なれました。

「正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。」

●「正しい」＝語源は「正義」です。完全に神の意に合致したという意味です。

●「悪い」＝正しいの反対です。神の律法を犯す、正しくない、罪深いという意味です。

そして、これらには冠詞がありません。それは、その本質、性質が正しい、悪いということを示しています。「立派な人」と思える人はたくさんいるでしょう。しかし、問題はその人の性質、すなわち「心」です。「正しい」とは、すなわち、行ない、ことば、思い、心、そのすべてにおいて、神の前に正しい人です。そのような人がこの世に存在したでしょうか？また、しているでしょうか？ NOです。ローマ3：10に「義人はいない。ひとりもない。」とある通りです。

また、この「正しい方」は単数です。心が完全に正しい人、罪のまったくない人は神以外にはいません。イエスに罪がなかったということからも、この「正しい方」は人となってこの世に来られたイエス・キリストであることが分かります。ということは、十字架で死ぬ必要はまったくなかったことを物語るのです。そして、「悪い」は複数です。「正しい」イエスは「悪い・神に逆らう私たち罪人」のために死なれました。この「罪」が複数であるのは、一人の人の罪のためだけに死なれたのではないからです。全人類の罪のためです。I ヨハネ2：2に「この方こそ、私たちの罪のための、一私たちの罪だけでなく全世界のための、一なだめの供え物なのです。」とある通りです。

罪の赦しを得るためには「なだめの供え物」、すなわち「いけにえ」が必要です。旧約のレビ記にはこのように書かれています。レビ5：6－7「自分が犯した罪のために、罪過のためのいけにえとして、羊の群れの子羊でも、やぎでも、雌一頭を、主のもとに連れて来て、罪のためのいけにえとしなさい。祭司はその人のために、その人の罪の贖いをしなさい。7 しかし、もし彼が羊を買う余裕がなければ、その犯した罪過のために、山鳩二羽あるいは家鳩のひな二羽を主のところに持って来なさい。一羽は罪のためのいけにえとし、他の一羽は全焼のいけにえとする。」

2) イエスは「完全ないけにえ」としてただ「一度」死なれた。

キリストの死は罪に対する贖い、赦しを一度で完了したことを意味します。これは旧約の大祭司が贖罪の日に捧げるいけにえとは異なるのです。ヘブル9：24－28「キリストは、本物の模型にすぎない、手で造った聖所にはいられたのではなく、天そのものにはいられたのです。そして、今、私たちのために神の御前に現われてくださるのです。25 それも、年ごとに自分の血でない血を携えて聖所にはいる大祭司とは違って、キリストは、ご自分を幾度もささげることにはなさいません。26 もしそうでなかったら、世の初めから幾度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかしキリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。27 そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、28 キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。」

このように、キリストは完全ないけにえです。ヨハネ19：30に「イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、『完了した。』と言われた。そして、頭をたれて、霊をお渡しになった。」とありますが、もう贖いが完了したのです。イエスの死は死が終焉を迎えた瞬間なのです。死に勝利されたイエスによってもう罪のさばきを受けることはなく、サタンの敗北の日となりました。死がいのちと勝利へと変えられたのです。

3) イエスは「神のみこころに従って」死なれた。

イエスは死に至るまで神に忠実でした。ピリピ2：6－8「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。」。これが私たちの完全な模範です。

C. イエスの来臨の目的

1) 約束の救いを与えるため

「私たちを神のみもとに導くためでした。」、これはプロサゲインという動詞が使われています。その意味は「～に導く、連れて来る」です。みことばをいくつか見ましょう。ルカ9：41「…あなたの子をここに連れて来なさい。」、使徒16：20「…ふたりを長官たちの前に引き出して…」、同じ使徒27：27「…どこかの陸地に近づいたように感じた。」、I ペテロ3：18「…神のみもとに導く

ため…」。このことばは二つの背景をもつことばです。

(a) ユダヤの背景＝旧約聖書では、祭司となる人々を神の元に連れて来るときに用いられました。大祭司しか近づくことの出来なかった至聖所に、イエスは信じる者を招き入れてくださる、すなわち、信者を神に近づけてくださるのです。

(b) ギリシャの背景＝新約聖書にはこのことばの名詞形が三度使われています。ローマ5：2「またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みの信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。」、エペソ2：18「私たちは、このキリストによって、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づくことができるのです。」、エペソ3：12「私たちはこのキリストにあり、キリストを信じる信仰によって大胆に確信をもって神に近づくことができるのです。」。恵みによって神に近づくことができるというのです。

プロサゴーゲーとは「近寄ること」、「接近」、「近づく権利」という意味があり、宮廷にはプロサゴーギュー、すなわち、取次ぎ者、接見役と呼ばれている官職が存在しました。彼は、王の前に出ても良い人と出てはいけない人とを決める役割を持っていました。イエスは信じる者に神に近づく権利を与えることのできるお方、神の前に人を導いてくださるお方なのです。

そして、「…ためでした」とは、この救いこそがキリストの死の目的だったというのです。彼の死は神と人との隔てを打ち砕き、道を開かれたのです。それによって人は神と個人的な関係を持つことができるのです。イエスの死が神と私たちとの間の境を取り除き、道を開いたのです。ヨハネ14：6「イエスは彼に言われた。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。』」とある通りです。「私たちが神のみもとに導くため」とあるのは、「あなたたちを彼は神のみもとに導くため」ということで、このことばの配列は「あなたたち」を強調するためです。信じる者にこのような特権、救いが与えられるのです。

2) その保証＝十字架と復活

(a) 「肉においては死に渡され、」、これは肉体的な死、イエスが確実に死んだことです。

(b) 「霊においては生かされて」、よみがえり、復活のことです。

この二つはどちらも受身形です。これは父なる神がなさったこと、キリストのよみがえりはその死があなたの罪を赦すのに十分であることの証拠だということなのです。

これまでペテロが教え励ましてきたように、この世ははかないもの、その先のこと、すなわち、永遠のことを考えて過ごすようにとここでも教えるのです。今日、私たちはキリストの模範を見てきました。神に対して従順に、忠実に生きたイエス、いかなる迫害が伴おうとも神に従い続けました。彼が経験した苦しみは「死」です。それでも忠実であり続けました。これこそ最高の模範です。そして、そのイエスには神からすばらしい称賛が与えられたのです。

ピリピ2：6－9「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。」

人々はイエスを嘲笑、誹謗し、軽蔑をもって扱い、悪行の限りを尽くし、そして、屈辱の呼び名で呼びました。しかし、父なる神は違いました。このイエスを高く上げて、すべての誉れ、栄誉を与えられたのです。

あなた方が主のために苦しみを、辛さを、悲しみを経験するときは特に、私たちの模範として歩まれたイエスをしっかり見上げることです。そのとき、この世の苦しみは一時的であり、その後に永遠の祝福があるという事実を思い出します。ここに希望があるのです！